



syoun

絆



2

2020 February

No.570

地域がん診療連携拠点病院・基幹型臨床研修病院・協力型臨床研修病院・地域医療支援病院・災害拠点病院・熊本DMAT指定病院・救急指定病院

理念 140年の歴史と設立の経緯を忘れず全人医療を提供します

基本方針

患者中心医療

患者の人権と意思を尊重します

患者診療3本柱

がん・救急・予防医療を中心に
医療機能の充実を図ります

完結型医療

地域の医療機関との連携を行い
安心できる医療の展開を行います

社会貢献

災害医療派遣・医療情報公開・医療
ボランティアの活動を行います

医療人育成

医療に携わる喜びが持てる医療人の
育成を行います

第17回 ひとよし温泉春風マラソン



2月16日(日)第17回ひとよし温泉春風マラソンが開催され、今年も救護スタッフとして、木村院長を含む9名の医師をはじめ、総勢74名の職員(一部外部スタッフ)がボランティアとして参加致しました。大会数ヶ月前から、大会実行委員会や人吉下球磨消防組合の方と議論を重ね、①救護本部に当院救護スタッフ(医師・看護師)の加入、②メディカルランナー(人吉下球磨消防組合)の新設、などの新しい取組も行ないました。

大会当日、予想していたよりも雨風が強く、各救護所に配置していたテントは吹き飛びそうになり、ずぶ濡れになりながら救護スタッフや周囲の関係者が抑えるような事態に……。幸いランナーや救護スタッフに大きな事故がなく大会を終えることができ安心した次第です。

新しい取組である、①当院救護スタッフの救護本部加入に関しては、課題もありつつ一定の成果をあげられたと考えております。また②メディカルランナーに関しては、「消防の人の横を走ったから安心でした」というランナーの言葉を頂き、その役割の重要性を認識致しました。

最後になりましたが、大会関係者様、人吉下球磨消防組合職員様、当院救護所・一次救命処置に関する広報(シェア含む)をご協力頂いた皆様、ありがとうございます。次回大会も宜しく願い申し上げます。

人吉医療センター 救急看護認定看護師 杉松 幸太郎

人吉下球磨消防組合から救急救命士と消防士で編成したメディカルランナーとして初めて参加しました。大会を終え、特に大きな事故などもなく、一安心しているところです。メディカルランナーは、参加者の緊急時の対応を行うことが任務です。メンバーも最初は緊張した面持ちでしたが、参加者の皆さんに挨拶や声掛けを行いながら走っているうちに、緊張しながらも楽しく大会を終えることができました。また、今大会を通して多くの関係スタッフの皆さんと接し、様々な事を学ぶことができ良い経験になりました。今後も、日頃の消防業務はもとより、このような活動を通して地域に貢献していきたいと思っております。

人吉下球磨消防組合 救急救命士 中村 潤



追悼 瀬戸致行先生

当地域で長年産科医療の発展に尽力されました、瀬戸産婦人科医院 元院長瀬戸致行先生が昨年11月にご逝去されました。

瀬戸先生のご功績と在りし日の思い出を、瀬戸致行先生の次男で当院産婦人科医の瀬戸雄飛先生に寄稿いただきました。

「父のこと」

父は昭和8年(西暦1933年)、9月29日、長崎市出島に生まれました。本籍は人吉ですが、祖父が転勤族だったため、任地の長崎で生を受けました。祖母には血小板性の疾患があり、分娩時には弛緩出血で大変だったと聞いております。祖父の転勤に伴い、幼少期の父は大阪、名古屋、熊本、鹿児島を転々としてきました。昭和6年に復興されたばかりの大阪城や戦災で焼失する前の名古屋城の天守閣の写真が残されています。原爆で灰塵と化した広島城の絵葉書もありました。

幼少時は病弱で小学生の頃に一年休学し、その後は昭和9年生まれの方と同級となりました。休学中は本を読むのも禁じられ、天井ばかり見て暮らしたと言っていました。祖父は検事で、一時は自宅にバウカードが迎えに来るほどの羽振りでしたが、酒好きが祟って40代で脳出血に倒れました。介護を要する身となり、収入は激減、太平洋戦争の真っ最中に一家は貧乏暮らしに突入、鹿児島では空襲に遭い、ほうほうの体で人吉に戻ってきました。戦後は食料事情がさらに悪化し、生活は困窮を極めました。食卓に登るのは甘薯や南瓜ばかりで、後年の父はこれらの食物を嫌っていました。祖母は生計の足しに鶏を飼い、生まれた卵を売るのは父の仕事でした。慣れない畑仕事の手ほどきをしてくれたのは、お隣の復員兵でした。彼の名は川上哲治といました。数年前に評判の映画「この世界の片隅に」を見せましたが、当時の暮らしを思い出して嫌だったようで、著しく低評価でした。

その後の父の履歴は以下の通りです。

- ・昭和28年、人吉高校卒業
- ・昭和34年、熊本大学医学部卒業
- ・昭和35年、人吉総合病院で実地修練修了
- ・昭和39年、熊本大学大学院修了
- ・昭和43年、人吉総合病院産婦人科部長に着任
- ・昭和46年、瀬戸産婦人科医院を開業
- ・昭和55年、「人吉球磨性教育サークル」結成・代表
- ・昭和63年、思春期クリニックを開設
- ・平成19年、病室を閉じ、分娩・手術を止めて、外来診療のみとなる(36年間で15644例の分娩を取り扱った)
- ・平成27年、瀬戸産婦人科医院を閉院

この度、熊本大学の医局から発見された古い文集(昭和47年)から、開業当時の父の様子が伺えます。以下、抜粋。

「昨年の10月1日に開業してもう一年になろうとしています。その間、全くの足止め状態で、熊本市内に出たのが二回だけです。(中略)又開業しても一番困るのは看護婦不足です。それも産科だからと云うのでもないでしょうが、一度に二人も妊娠して産休に入ったり、結婚して止めたりすると、残りの看護婦にも数寄せが来て、文句の一つも出るようになります。又、入院患者の数の把握の難しさ、昨日までガラガラ空いていたベッドが、潮の満引きかなんか知りませんが一晩の内に五つも六つもお産がありますと、ささやかな小医院のベッドは、はち切れてしまい、自宅の居間に蒲団を敷き、家内子供は実家に追い返すという始末です。こんな時に更にお産の入院がありますと、ぞーとします。」

父は、2018年9月25日に倒れました。祖父のことがあったため、脳卒中にならないよう若い頃から酒を控え、タバコは一切吸わず、高齢になってからは、心房細動に対してアブレーションまで受けたにも関わらず、脳梗塞が突然父を襲いました。生来快活で前向き、ユーモア精神に溢れた父でしたが、闘病生活に入ってから、すっかり笑顔が消え、悲嘆することが多くなりました。リハビリを懸命に頑張っていましたが、高齢での脳梗塞から回復することは容易ではなく、一步前進するかと思えば、誤嚥性肺炎や骨折で二歩後退するような状況でした。半身不随ではあるが、明晰なままの頭脳は、自分が自分では無くなっていくことの辛さを、生き地獄のように感じていたのではないかと思います。しかし、家族としては回復を諦めきれず、父を励まし続けました。誤嚥性肺炎が悪化し、リハビリ先の病院から人吉医療センターに転院したのは、昨年の10月でした。入院時はショックに近い状態でしたが、抗生剤による治療が奏効し、呼吸状態も改善し、会話もできるようになったため、私はリハビリの病院に再度転院させるつもりでいました。その事を伝えると父は「自信がない」と呟きました。父が亡くなったのは、その翌日、2019年11月26日でした。86年の生涯でした。

父は生前、人吉新聞や月刊紙「くまがわ春秋」によく投稿していました。くまがわ春秋に最後に投稿したのは2018年12月号、倒れてから3ヶ月後でした。タイトルは「恥づかしい医者の不養生」、以下抜粋。

「医師会関係、中学、高校時代の友人達、親類の方々、又開業時代からまだ親しくしていただいている元瀬戸産婦人科医院の方々にお見舞いに来ていただき心から感謝している▼家に帰って静かな生活、更なる闘病生活を続けることになろう▼これからは安易に頼み事を引き受けることなく、「いや!」と云える人生を送る積もりである。しかし満85歳だから(男の平均寿命は81歳)、もう西方浄土からお迎えが来られてもいいのですが、知的障害者育成に一生を捧げられた画伯であり教育者であった西峯多木次先生は「人間は誰でも死ぬときは障害者になるのだ」と云われていました。まさに私もそうになりました。」

また、それから半年程して、医局の先輩の訃報に接して投稿した追悼文には「まさか先生が私より先に西方浄土に行かれるとは!しかし、私の方もそう遠くはないと思います。その時、お浄土で先生とお会いできることが有難いと思います。また、先に逝かれた教室の方とも再会できるでしょう。と申しまして私は死ぬことが著しく恐い未完成な凡人ですが。」と書かれていました。

自分に与えられた課題と真剣に向き合いながら命を燃やし続けた、濃密な86年の生涯であったと思います。

最後になりますが、父の療養に御尽力いただいた人吉医療センターの方々には感謝を申し上げます。有り難うございました。



産婦人科 瀬戸 雄飛

腫瘍内科・緩和ケアチームラウンドについて

当院の緩和ケアチームは医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、リハビリスタッフ、公認心理師、ソーシャルワーカーなどの多職種により構成されています。がん患者における疼痛を始め、心身のあらゆる症状の緩和、心理社会的問題の解決を目的に外来や入院患者を対象に毎週水曜日にラウンドを行っています。症状を緩和する方法として外科的治療や薬剤によるコントロール、栄養管理、緩和リハビリテーション、心理カウンセリングなど、さらに社会的問題に対しては社会資源の利用支援など専門性を活かしながら総合的に対応しています。また、月1回の緩和ケア委員会では、課題や問題点なども検討し、全人的医療の実現の為に他部署とも積極的に連携を図っています。

そして、昨年4月より第1・3水曜日には国立病院機構熊本医療センター 腫瘍内科部長 境 健爾 先生にもラウンドにご出席いただいております。腫瘍内科 境 先生のラウンドでは、すべてのがん種について、診断や



化学療法など積極的治療や終末期緩和ケアなど病期を問わず院内からの幅広いコンサルテーションにご対応いただいております。がんだけではなく、多くのがん患者が罹患している可能性のある糖尿病や感染症などの一般内科領域にまでいたる広くて深い知識と技術で、がん診療全体の司令塔のような役割を担っていただいております。

緩和ケアチーム がん専門相談員 南 秀明

がんの診療に関してわが国の抱えている多くの問題点、たとえば少子超高齢社会、単身高齢社会、低所得高齢者の増加、地域医療体制の崩壊などの問題点が、豊かでのどかなこの球磨の地域にも影を落とし始めています。球磨地域で完結するがん診療を向上させるために、腫瘍内科医として、院内の医師・看護師・メディカルスタッフ、さらに地域のクリニックや病院と協力し理想的ながん医療を進めて参りたいと思います。



国立病院機構熊本医療センター
腫瘍内科部長 境 健爾 先生

第2心臓 カテーテル室 工事のお知らせ

当院の放射線科と脳神経外科が木曜日の午後から使用していた血管造影室へ、平成27年にポリグラフを導入し、第2心臓カテーテル室として使用してきました。しかしながら、装置の性能不足であり、心臓の検査・治療に難渋していました。そこで今回、最新機器を導入することになり、併せて第2心臓カテーテル室を工事する運びとなりました。

そのため、3月いっぱい工事期間となり、騒音等ご迷惑をおかけいたします。工事がすべて終了しましたら、皆様へご報告させていただきます。

循環器内科部長 中村 伸一

連載 入院時支援 Vol.2 入院前からの退院支援 栄養管理室編

管理栄養士は、入院する前から血液生化学検査から求めた栄養指数を用いて栄養スクリーニングを行い、栄養状態が良好か不良かという栄養評価を実施します。

入院前の栄養状態が手術や化学療法・放射線治療・その他の治療に大きく影響することを説明し、食生活に問題点が見られる方は入院までの食事についてアドバイスをを行います。栄養評価で不良と判定された患者さんには、栄養補助食品を紹介し食事と併用してもらうよう提案しています。また、嚥下機能に応じた食形態や食物アレルギーなど食事に関する情報を電子カルテ内へ添付し病棟担当栄養士へ伝達を行い、入院時の業務が速やかに行えるようまた、患者さんが安心して入院生活を送れるように取り組んでいます。

支援の実例として、「甘草（かんぞう）アレルギー」という患者さんの症例を紹介します。

「甘草」は漢方薬に使われていることが多いマメ科の多年草です。甘味度が高く、高い塩慣れ効果を持つため味

噌やしょう油等の調味料や漬物・佃煮に広く使用されています。そのため事前に甘草を含まない調味料の準備と別メニューの献立をた

て、入院中は問題なく食事を提供できました。このように、入院前に患者さんの情報を収集し、スタッフが情報共有することで、安心して安全な医療を提供することが可能となります。

また、最近導入された体成分分析装置 In Body は、筋肉量や体水分量、体脂肪率などより客観的に正確な栄養評価が行えるようになりました。

これを用いて、効果的な入院前からの栄養支援に活用できるよう計画しています。



管理栄養士 大岩 洋子

新たな認定看護師制度

日本看護協会では、1996年から熟練した看護技術と知識を用い、水準の高い看護実践により、看護ケアの広がりや質の向上を図ることを目的に、認定看護師制度を立ち上げ、現在では21分野2万人超の認定看護師が全国で活躍するまでとなっています。その中で、医師不足による適切な医療提供までのタイムラグや根拠不足を感じながらの看護計画立案等の課題がありました。それらを解消し、タイムリーなケアの実施による症状緩和や重症化予防、看護ケアの充実のために、2013年から認定看護師を対象にした特定行為研修を試行開始し、ついに、来年

度から特定行為研修を含めた認定看護師教育が開始されます。具体的には、アセスメントする力や多職種協働力、その分野に必要とされる特定行為区分がプラスされ、タイムリーに患者に適切なケアを提供できる認定看護師が育成されると思います。私は、褥瘡ラウンドを行っていて、タイムリーにケアできれば、もっと早く治癒するのと思うことが多くあり、特定行為研修を受けている最中です。研修の中では以前の認定看護師研修では学ばなかったことを多く学び、日々の看護の中で活用しています。認定看護師だけでなく、多くの看護師が特定行為研修を受けることで看護ケアの充実が図れると考えています。

皮膚・排泄ケア認定看護師 繁富 香

縫合勉強会

去る1月23日、病院主催の縫合勉強会に参加させて頂きました。今回は直径1cmに満たない細いゴムチューブを使用した血管吻合をイメージしたコーナーと、豚足を使用した腱の縫合を想定したコーナーの2コーナーに分かれていてそれぞれのブースで縫合を練習する事ができました。昨年の7月にも縫合勉強会はありましたが、



その際は皮膚の真皮縫合の練習や結紮の練習であり、今回はより一層アドバンスした内容に感じました。特に血管吻合に

は難渋しました。牟田先生は表情一つ変えずに吻合を終えられていましたが、いざ実際にやってみるとズレたり狭窄したり捻れたりとかかなりの技術が必要な事が



理解出来たことは良い経験にもなったと思います。豚の腱の縫合も、整形外科の専門的な縫合があると知れる良い機会となりました。この機会を下さった病院と医療機器メーカーの方々、本当にありがとうございました。自身も外科系に進みたいので、このような行事をこれからも有意義なものにしていきたいです。

臨床研修医 泉 泰純

特別臨床実習（地域医療）

今回、地域医療実習のクリニカルクラークシップとして3週間の実習をさせていただきました。熊本、宮崎、鹿児島県の3県にまたがった医療圏を見たい、人吉・球磨の風土に触れたいという思いから人吉医療センターでの実習を希望しました。実習スケジュールは総合診療科を中心に回りながら、院内では救急外来・小児科・整形外科を、院外では週1回の五木村診療所・訪問看護や人吉市乳幼児検診で実習させていただくという形でした。本実習の中で特に印象に残った五木村診療所と訪問看護について記載します。

五木村診療所では、外来陪席だけでなく、指導医の田浦先生についていただきながら問診・診察・カルテ記載を行いました。また、患者さんが受付をしてから薬を受け取るまでご一緒させていただき、診療所がどのように動いているかを肌で感じました。診療中には診療技術だけでなく、行政・保健・福祉と医療がどう関わるべきかを考える機会もいただきました。

訪問看護では、人吉・球磨の広大な範囲を訪問看護師

の方と共にまわりました。地域の特性上、高齢化率が高いため、退院後一定期間の療養生活支援が必要になってきます。しかし、それぞれ社会背景が異なるため、一律な対応ではなく状況に応じて柔軟に対応していかなければならない、絶対解があるわけではない実情を知ることが出来ました。

実習以外でも研修医の先生や指導医の先生、事務の方々には大変よくしていただき、ご飯に連れて行っていただいたり、温泉をご紹介いただいたりと人吉の魅力を知ることが出来ました。

最後に今回の実習でお世話になった方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



熊本大学医学部5年 松原 大樹

ご存じですか？髪の毛の寄付

“ヘアドネーション”をご存じですか。

ヘアドネーションとは癌や白血病、先天性無毛症、不慮の事故などにより髪の毛を失った子ども達に、寄付された髪の毛でウィッグを作り無償で提供する活動です。髪の毛を寄付される時は31cm以上の長さがあること（カラー、パーマ、白髪でも良い）、切り口を輪ゴムでしっかりまとめていること、完全に乾いている事等の条件があります。こういう取り組みがあることを広く知って頂きたい、と髪の毛を寄付した当院職員のコメントを紹介させていただきます。

私がヘアドネーションを知ったきっかけは、数年前に本紙（翔）に載せてあった職員の記事を見てからでした。ウィッグが必要な子ども達のお役に立てれば嬉しいです。また、挑戦します。

医事課 医療クラーク 溝口 真理



連携施設 探訪

当院は、みなさんが住み慣れた地域で安心して生活していただけるよう、人吉・球磨地域の医療・福祉機関と連携して 地域包括ケアを推進していきたいと考えています。そこで、地域の社会資源を周知していただくため、連携施設をご紹介します。

今回は「特定施設入居者生活介護 そらまめ」「リハビリテーション・デイサービスセンター どんだん」さん（熊本県球磨郡あさぎり町岡原北 1125）です。

特定施設入居者生活介護 そらまめ

リハビリテーション・デイサービスセンター どんだん Vol.34

【施設の特徴】

《どんだん》

リハビリ専門職を配置して、体操や運動、脳のトレーニングに特化したプログラムを実施しています。また、社会参加や、より生活に近い場での生活動作訓練を目的として、外出計画を多く取り入れています。

《そらまめ》

入居いただく方のご意向に沿うことができるよう15名定員の過ごしやすい施設です。

その方の暮らしに沿った環境づくりを心がけ、一日一日その方らしい過ごし方が出来るようお部屋も広くし慣れた親しまれた家具や道具など持ち込めるようご配慮させていただきます。安全に、安心に過ごすことができるように健康管理、病状の急変対応は協力医療機関が隣接しています。食事や生活訓練等の際には白髪岳や日本庭園を一望できる癒しの空間があります。

【対象者】

入居：介護保険認定者の方・病状疾患が安定している方
共同生活が可能な方

通所：介護保険の要支援1～要介護5の認定を受けた方

【サービスの内容】

特定施設入居者生活介護 15床

介護予防通所介護・通所介護 定員20名

【地域の皆様に一言】

平成21年6月に開設し、今年で10年目を迎えました。毎年開催される夏祭りには、たくさんの地域の皆様において頂いています。ご利用していただく方が「自分らしく」生



活できるようにどんだんでは生活リハビリ中心に、屋外での歩行訓練や、社会参加として外食ツアー、買い物ツアー等、年間計画を立てて実施しています。

そらまめでは、ご利用者様の意向を伺い、ドライブや外食等を行っています。

詳しい活動の様子や空き状況等、ホームページに掲載し随時更新しております。ぜひ一度ご覧ください。

URL <http://soradon.to-yo-kai.com>

【お問い合わせ】

TEL：45-8600 FAX：45-8610

相談員：増田香織

【訪問者の感想】

「どんだん」という名称は、その地域の方で「遊び場」という意味だそうです。誰でも気軽に集える場所にしたいと命名され、地域の方に親しみを持たれる良い施設名だなと思いました。こちらの施設には、常勤の作業療法士が勤務されており、リハビリにも力を入れておられます。

心血管総合カンファレンス表彰

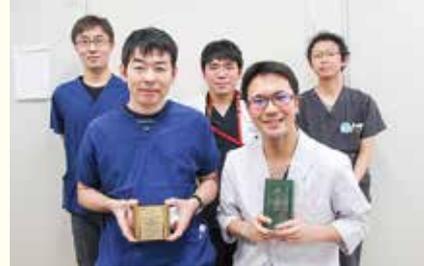
熊本心血管総合カンファレンスにおいて、昨年10月12日（第5回）には研修医1年目筑地先生が「左室流出路圧較差を認めたタコツボ型心筋症の一例」を発表し特別賞を、2月15日（第6回）には同じく1年目研修医の井村先生が「著明な血小板減少を伴った急性大動脈解離の症例」を発表し、最優秀賞を受賞しました。筑地先生の特別賞はまさしく「特別」なもので、第5回は最優秀賞を2年目研修医の先生が受賞されていましたが、筑地先生の発表が大変素晴らしいとのことで初めて特別賞が設定されたそうです。

○受賞コメント

（筑地先生）熊本の循環器内科の先生方の前で発表するのは大変緊張しましたが、荣誉のある賞を頂き嬉しく思います。これからも自己研鑽に励んでいきます。

（井村先生）自分の受賞には大変驚いています。毎日遅くまで丁寧に指導して頂いたおかげで、本番では緊張することもなく、良い発表をすることができました。本当にありがとうございました。

お二人ともご指導いただいた循環器内科の先生方には大変感謝されていました。病院にとっても大変名誉あることです。本当におめでとうございます。



左：井村先生、右：筑地先生

熊本県臓器移植 院内コーディネーター研修会

2月13日 熊本県臓器移植院内コーディネーター研修会が熊本総合病院において開催されました。今回は県南地域として、熊本総合病院、熊本労災病院、水俣市立総合病院、球磨郡公立多良木病院の院内移植コーディネーター9名の参加がありました。

まず、熊本県健康福祉部薬事班の古川氏より院内コーディネーターの設置要綱、役割について説明が行われ、その後、熊本県臓器移植コーディネーターの吉田氏より「国内及び熊本県内の移植医療の現状と今後の取り組み」について臓器提供件数の報告が行われました。吉田氏より、2010年の臓器移植法改正により、家族承諾により提供可能になったことで全国的に提供件数は大幅に増加したこと、熊本県では2014年まで提供がなくその後も件数は伸びていなかったが、2018年は全国最多で5例（脳死下4例、心停止下1例）の提供が行われた年となった事を報告されました。件数が増加した理由として、主治医からご家族へ病状説明のタイミングで、臓器提供の選択肢があることを情報提供がした事により、ご家族が臓器提供を知ることができたと振り返られました。

搬送先の施設により心停止下や脳死下での提供可能な臓器は変わります。回復が見込めない状態にあるときに、患者・家族へ臓器提供の機会があることについて説明し、その意志を汲み取ることは、医療従事者にとっては大きな責任と考えます。臓器移植意思表示の有無については当院では初診の間診時に聞き取りを行い、電子カルテ上で職員が情報共有できる体制を整えています。

院内移植コーディネーターとして、まずは職員へ移植コーディネーターの役割、そして当院が心停止後の腎臓・角膜提供可能な施設であることを知ってもらい、家族へ臓器提供の機会があることを伝える役割をメディカルスタッフと共に担っています。そして住民にはACP（アドバンスケアプランニング）と同様に事前に家族等と臓器提供の意思について話し合うことを啓発していく計画を立てていきます。

院内移植コーディネーター 社会福祉士 杉松 紗織

3月は自殺対策強化月間になります

自殺対策基本法では、例年、月別自殺者数の最も多い3月を「自殺対策強化月間」と定め、地方公共団体、関係団体等とも連携して「誰も自殺に追い込まれることのない社会」の実現に向け、相談事業及び啓発活動を実施するとされ、各地で相談事業の拡充や啓発活動などが行われます。

人吉球磨地域は、熊本県内でも自殺死亡数が高い地域として、熊本県人吉保健所を中心に平成25年度より関係者と効率的な自殺予防対策を協議や圏域の連携体制の強化を目的に人吉球磨地域自殺対策連絡会を開催されております。また、個別事例を通して関係機関の連携体制整備を目的にH28年度より人吉球磨地域自殺対策検討会が開催され、当院も継続して参加を行っております。

今年度も2月6日（木）に熊本県人吉保健所にて2019年度人吉球磨地域自殺対策検討会が開催され、熊本県人吉保健所、吉田病院、光生病院、球磨郡公立多良木病院、当院、人吉警察署、多良木警察署の参加があり、主に事例を通して、実際の連携を振り返り、そこで見えてきた問題や課題等について協議し、今後の連携方法について確認を行いました。

精神科分野について当院では専門医師がおらず、近隣の精神科病院や行政との連携は不可欠です。患者さんが適切な治療を受けることが出来るよう、今後もこのような会を重ね、顔の見える連携を図り、現場での連携が円滑に行えるように努めていきたいと考えております。

医療福祉連携室 田頭 隼人